ESSAY

LA DOLCE VITA

海とイタリアをこよなく愛し、ワイン、アート、マリン文化に深い造詣を持つ伊藤英一氏。
氏がこれまで体験してきた地中海のマリタイムの煌めきを中心に、海と食とボートに関わる彼らのライフスタイルを語る。

text & photo: Eiichi Ito

#51
イタリアのRIB事情

RIBとは

Rigid-Hulled Inflatable Boatを略してRIB(RHIB)と呼んでいる。FRP製の船体にエアーを充填した大きなチューブを合体させたボートで「複合艇」というカテゴリーに分類される。一般的に認識されているゴムボートとは素材、形状及び性能も次元が異なるハイテクボートである。

僕はRIVAを母船に、RIBをセカンドボートとして長年愛用してきた。イタリアンRIBの20フィートから33フィートまでの4艇乗り継ぐ中で、どんな海象時にでも対応出来る素晴らしさに惚れ込んでいる。まさに「海の4駆」と呼ぶに相応しく頼もしい海のパートナーである。

チューブが大きな浮力体となるから走行安定性は抜群、低馬力の船外機で高速走行が可能、離着岸も容易といいこと尽くめだ。チューブがどれ位の年月保つのか…とよく聞かれるが、メンテナンス次第でいつ迄でも使用可能である。万が一大きく破損してもチューブ交換は可能だし、チューブ補修の様々な方法があるから全く心配はない。

RIBはもともと軍の上陸用舟艇として開発された経緯がある。現在では世界中の沿岸警備や麻薬取締り等や駆逐艦、フリゲート艦や巡視艇等に搭載されて各種の洋上活動に欠かせないものとなっている。

近年でのRIBは用途が多目的化して、あらゆるワーク系やレジャー対応の様々な形状のRIBに発展している。ダイビングにヨットレースの伴走に海難救助、海上消防へと活躍の場が広がっているのだが、恐らく先進国で最もRIBの普及が進んでいないのが日本ではなかろうか。特にレジャーでのRIBを見かけることは殆ど無いに等しく、見かけてもサイズが小さいのが現状である。

なぜRIBが普及して来なかったかを考えるに私見であるが、釣り好きな日本人にとってPV製の小さなゴムボートはかなり普及しているのだが、ゴムの性能上耐用年数がごく短い。このゴムボートがあちこちで乗り捨てられ、朽ちている姿をよく見かける。このゴムボートとハイテク素材とFRPとを合体したRIBとを同一視しているのではないだろうか。その様な認識が早く変わればいいと思う。

世界中のヨットマン憧れの港町ポルトフィーノには、スーパーヨットのみならず大型のRIBもやって来る。船外機2基掛けもあるが多くはディーゼル・インアウトやディーゼル・インボードのサーフェス・ドライブでジョイスティック装備だ。サイズはどれも30フィートオーバー、40フィートクラスもスタン着けてされていた。何れのRIBもキャビン付き、シャワーやギャレー完備である。さすがイタリア製だけあって日本では見かける事のないゴージャスで遊び心満載のRIBに心躍る。

RIBが1,000艇も係留されているナポリ近郊のRIB専用マリーナ。20～30フィートクラスのRIBはキャビン付きも多く見受けられた。真っ白いチューブと船体が居並ぶ様に驚くと共に圧倒された。
毎年イタリアのジェノバとフランスのカンヌで開催されるヨーロッパ最大級のボートショーでは、年々RIBの展示面積が広がり展示艇も大型化。中には50～60フィートクラスも見受けられる。今までレジャー用RIBと言うとチューブ含め白主体だったが、ここ数年は黒が目立つ様になった。これも一つの流行りなのだろう。

イタリアンRIB

イタリアのRIBはレジャーユースに特化して発展し、今や世界のRIB市場を牽引している。イタリアのRIBビルダーは30社以上あると言われている。しかも其々のビルダーが個性あるRIBを毎年の様に次々とカンヌやジェノヴァのボートショーに発表している。近年ではボートショーに行く度にRIBの展示面積が飛躍的に増大しているのを感じている。

サイズは2000年代中頃までは20フィート前後が主流だったが、この10～15年程で30フィート前後を各ビルダーがこぞって発表し、現在では40～50フィート、60フィートも珍しくなくない。各ビルダーがどれ程を年間生産しているか大手のビルダー何社かに聞いてみたことがある。リーマンショック前は年間400～500艇、大手は700～800艇の生産は当たり前の様だったが、さすがにショック後は半分くらいに迄落ち込みながらも最近ではかなり回復しているとの事である。

大型RIBに搭載される船外機はSUZUKIが群を抜いているがMERCURYも多く、YAMAHAやHONDAも見受けられ、大排気量の2基掛けは無論の事、3基掛け4基掛けも登場している。小型RIBにはイタリア製SELVAやEVINRUDEが多い様に感じた。船外機以外でもインアウト・エンジンでのジョイスティック装備やサーフェイス・ドライブやジェット推進艇も多い。

南北に長いイタリアでは南の地中海側が特にRIBの需要が多い。ナポリ近郊のマリーナへ行って驚いた。何とRIB専用のマリーナとの事で1,000艇ものRIBが並ぶ様は壮観だった。

JOKER BOAT視察

ミラノからほど近いモンツァの南にシップヤードを構えるJOKER BOATは、イタリアに於ける他のビルダー同様1970年代に創業している。当初のRIBはボトムは木製、キールがインフレータブルでチューブは早くもハイテク素材のハイパロンで製造された。当時のサイズは2.5m～5.2m。1980年代から90年代には年間1,000艇を生産したという。基本がファミリー・レジャー用で他のイタリアンRIBビルダーのコンセプトと同様である。2000年代中頃から艇は大型化し、現在では4シリーズ20モデルを生産している。最大艇は35フィートだ。小型のJET RIBも生産していてバラエティ豊か。因みにNUOVA JOLLYのCEOは兄弟との事。

僕はイタリアで時間があるとよくRIBをレンタルする。海でも湖でもRIBレンタルは可能である。しかもエンジンが40HP以下なら免許証も不要である。

RIBは操船してみないとその素晴らしさは解って貰えないから、マリーナやクルーズ会社、ダイビング業者等がRIBをどんどん導入して、一般ユーザーに体験の場を提供して欲しい。

いま僕はワンオフで5艇目のRIBを製造する準備をしている。デザインも完成してモールドを製作中である。サイズは38フィート、搭載エンジンは300HP×2基掛けを予定している。おそらくレジャーRIBとしては日本で最大クラスだと思う。来年はこのRIBで東京から瀬戸内経由で九州へのクルーズを計画している。**P.B.**

Profile

伊藤英一

事業家。ボート歴は10代から既に半世紀以上。欧米の多くのリゾート地を訪れ、その土地の食やワイン、アート、音楽等に触れることを至上の喜びとしている。RIVAとRIBの熱烈な愛好家。